

文章の書き方 テキスト

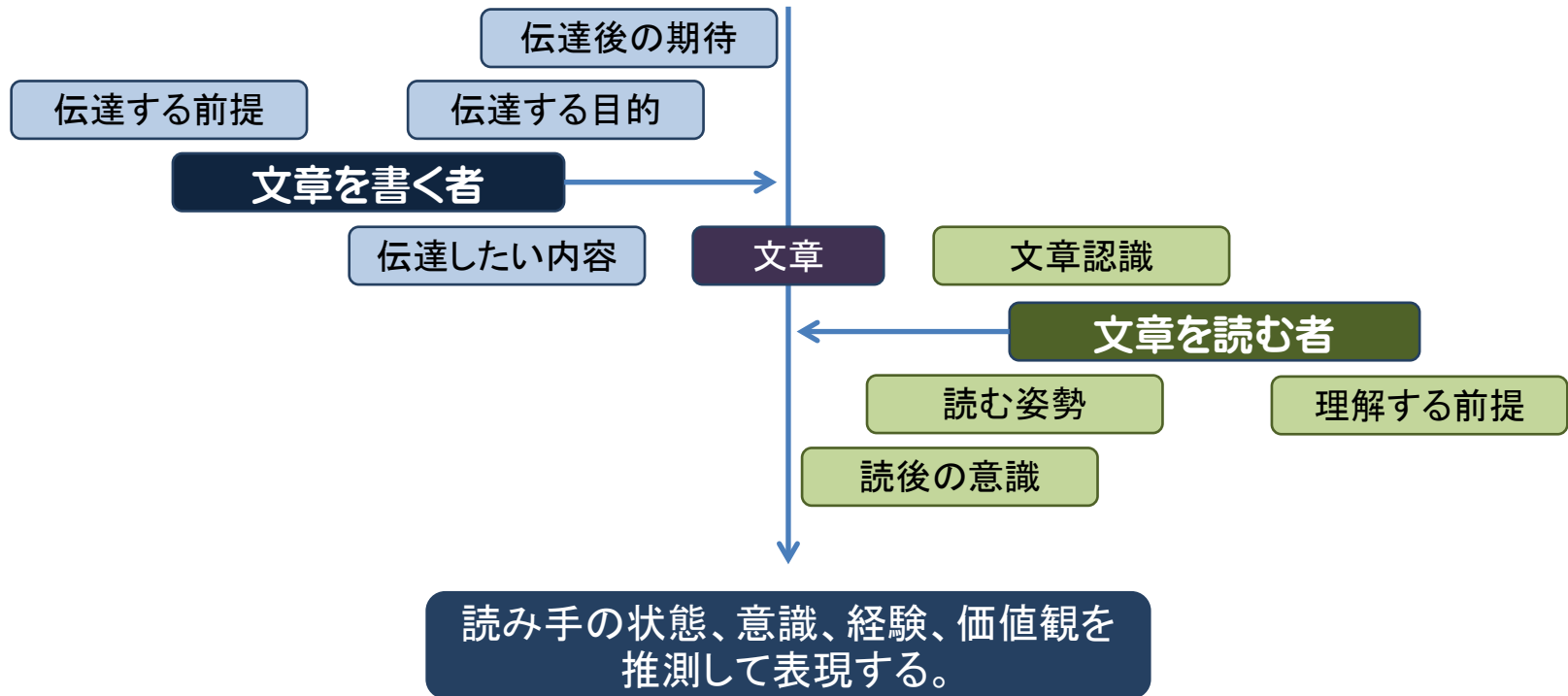
(株)シードウィン <http://www.seedwin.co.jp>

表現する前の四つ確認事項

文章表現をする時、読み手を意識している必要がある。

コミュニケーションを行う時、自らを中心に置きがちである。

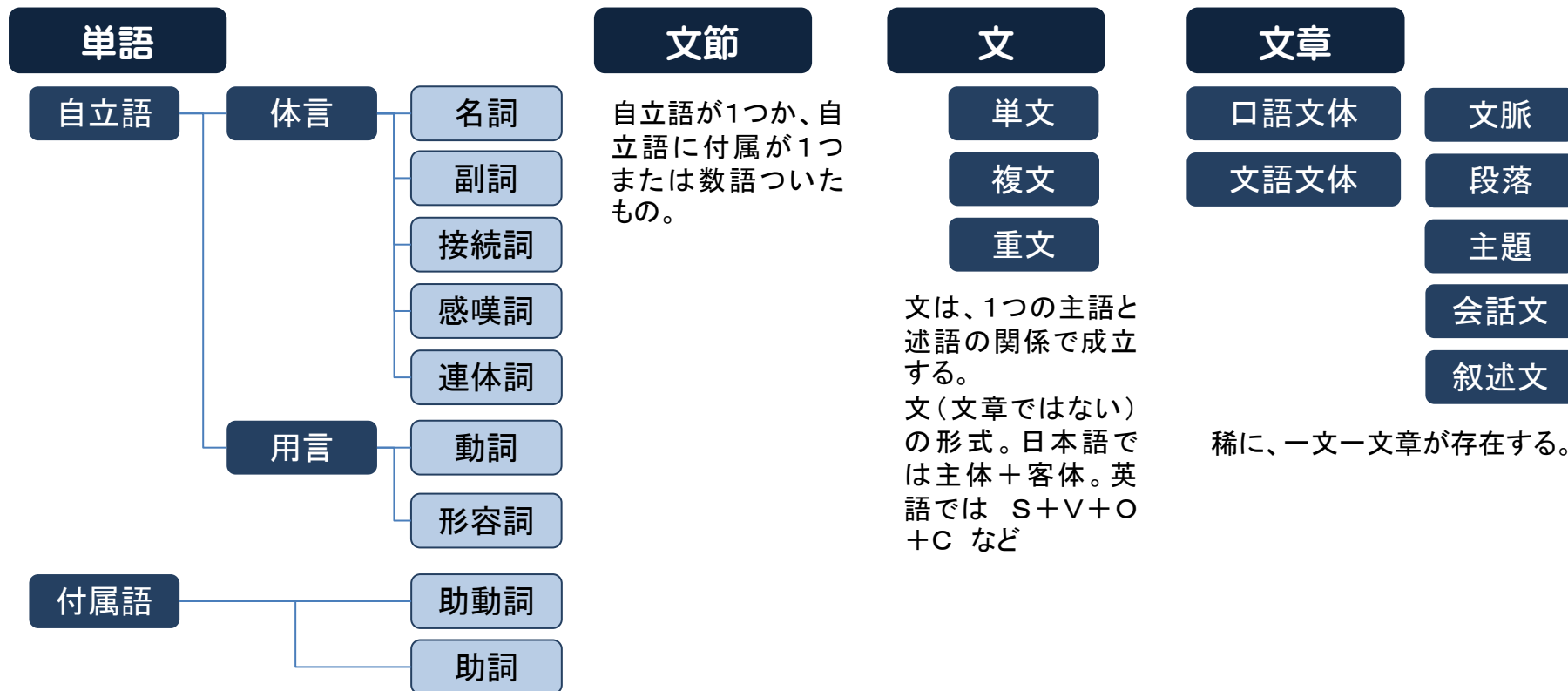
1. 書く目的は何か。
2. 目的の前提を確認したか。
3. 誰のために書くか。
4. 書き終えたら何が始まるのか。



日本語文の基礎知識

単語が集まって文節となり、文節が集まって文となる。文が集まって文章になる。

文法の入り口程度は覚えておこう。



※1 連体詞は、主に体言を修飾する。

(例) ある本、その現象、とある街角

※2 用言の活用形 未然形、連用形、終止形、連体形、假定形、命令形

誰もが、最も上手く表現できる文章の文字数は400文字前後。
400字詰め原稿用紙1枚が、上手に書ける範囲。

文章表現の練習は、400字前後で行うのが良い。

伝達力を上げる表現条件

文章表現で、以下項目を守ると、文章が引き締まり読みやすくなる。

自らも内容を検討しやすくなる。

- 1 センテンスは40字以内で書くようにしよう。
- 2 コト、モノは使わないようにしよう。
- 3 「である」「です」と文末は統一して表現しよう。
- 4 「私は...思う」「考える」「感じる」などを使わないで断定して言い切るようにしよう。
- 5 これ、あれ、などはできるだけ少なくしよう。
- 6 副詞は意味を曖昧にする。なるべく使わないようにしよう。
- 7 接続詞を無駄に使わないようにしよう。

占い文は80字以上で書けという。意味が曖昧になり、幾つかの解釈の仕方が出来るからである。新聞記事などは1センテンスは40字以内で表現されている。

コト、モノはすべての体言と置き換えられる。意味が曖昧な時に使われる場合が多い。コト、モノを使わないように表現を試みると、コト、モノを使った時よりも意味が鮮明になる。

1つの文章のなかでは、「である調」「ですます調」のどちらかに文末を統一しよう。文章表現の原則である。混在するとマが抜けたようになる。

「私は・・・と思う」と表現するのではなく、「何々である」と断定するようにしよう。推定として「思う」を使わねばならない時以外は使わないようにする。人称代名詞を使わねばならない時は少ない。「私が書いている」のであるから、特に「私は」と入れる必要はない。

指示語は、指し示す語句が指示語の前に出ている。その語句が分かり難ければ意味を理解するのに時間がかかる。同じ語句の重複が多くなり過ぎなければ、指示語を使わない方が理解を早くする。読みやすくなる。

「いよいよ」「まさに」「やがて」などの語。状態(ひろびろ)、程度(いささか)、陳述(あたかも)の副詞がある。程度を示す。曖昧さがある。論文などでは使わない方がよい。

単語、文節、文をつなぐ働きをする単語である。使わなくても良い場合が多い。接続助詞、句点など済む場合が多い。

単語の意味を定義しよう

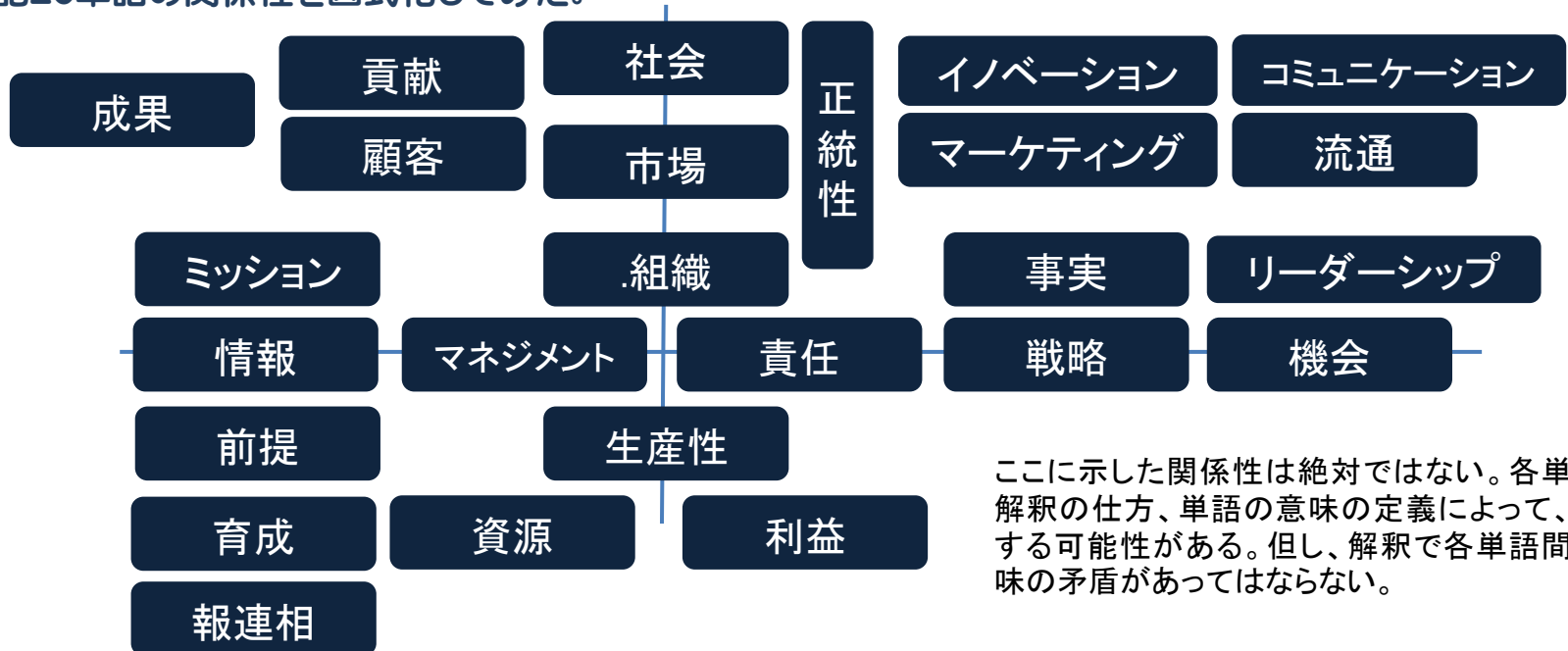
辞書で説明されている単語の意味が適切であるとは限らない。辞書には、一般化した単語の意味が掲載されているので、万人に通じるが、不適切な場合もある。自らの仕事を通して、各単語の意味を検討しよう。

今後、仕事を進めていくために、自身で十分に理解しておく単語群がある。

以下に25単語をあげた。単語の定義を試みてみよう。1単語の定義は200字程度で書き表そう。

1. 育成
2. イノベーション
3. 機会
4. 貢献
5. 顧客
6. コミュニケーション
7. 資源
8. 事実
9. 市場
10. 社会
11. 情報
12. 成果
13. 生産性
14. 正統性
15. 責任
16. 前提
17. 戦略
18. 組織
19. 報連相
20. マーケティング
21. マネジメント
22. ミッション
23. リーダーシップ
24. 利益
25. 流通 (50音順)

上記25単語の関係性を図式化してみた。

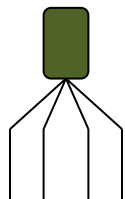


ここに示した関係性は絶対ではない。各単語の解釈の仕方、単語の意味の定義によって、変化する可能性がある。但し、解釈で各単語間の意味の矛盾があってはならない。

結論を持っていくパターン

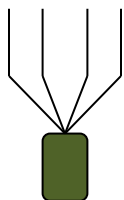
表現形式では、結論のおき方に次の5つの方法がある。

頭括式論述



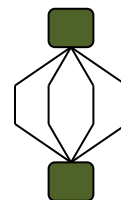
① 文章の先頭に結論を置く方法である。結論を先に示した方が説得しやすいと思われるとき、結論が優れていると自信を持っているときなどに使う。詩的発想を好む人が多い。

尾括式論述



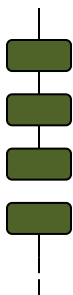
② 文章の最後に結論を置く方法である。結論が後ろにあって、起承転結の通りに進めていく方法である。論述形式の代表である。

双括式論述



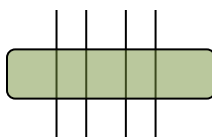
③ 文章の最初と後の2箇所に結論をおく方法である。最初の結論と最後の結論は同じことを述べている。前後で別の表現の仕方をする方法。どちらかに結論としての重点をおく。

追歩式論述



④ 結論が次々に展開させる方法である。論文では余り使われない。どんどんと結論が発展していくときである。これは、小説などの表現方法である。論文の場合は、一つの結論に対して、一つの文章となる。

列叙式論述



⑤ 結論が分らず、全体を読んでイメージする方法である。この方法は論文では使われない。紀行文、日記文に多い論述形式である。

書き始める前に結論が決まっていないと、列叙式論述になる確率が高くなる。意外に多くの方が当てはまる。

 結論

使ってはならない表現形式

論文では、①～③の論述形式を使う。もっとも多いのは②の尾括式である。時として、頭括式が使われている。これは、書き慣れてくるにつれて、使い分けができるようになる。

起承転結と論述形式とは直接に関わらない。起承転結は主張構成の考え方である。

文章の表現ジャンル

＝論文形式＝

論文

研究成果に基づいて論理的手法で書き記された文章。

報告文

業務、実験、会議、等の結果を知らせるためにまとめた文章。

解説文

意味、現象等を説明した文章。ニュース解説、映画評論等。

＝エッセイ形式＝

エッセイ

作者の知識を基にして、体験等から感想、思索、思想を表す。

紀行文

作者の知識を基にして、旅の経験、地域解説等を表す。

＝小説形式＝

小説

大衆に分かり易くした虚構の物語、説話を表す。

＝その他形式＝

シナリオ

脚本、台本とも言う。セリフ、ト書きからなる設計図的文章。

韻文

聴覚に一定の像をイメージさせるリズムを持つ。詩。

日記

日々の記録を表した文章。主にテーマはない。

仕事文

仕事上の特殊な文章。法律文、特許文など。

文学ジャンルには、左に示した形式などがある。細かく分類するとさらに多くなるが、シナリオや韻文以外の形式に決まった表現形式はない。

書かれている内容、論旨展開の方法で、何々文とされている。

論文のつもりで表しても、エッセイ風の部分もあれば、小説風もある。小説として表されていても、解説文のような小説もある。小説だからセリフの箇所が必要であるとは限らない。

論文だから、「ゆえに」とか「なぜならば」などの語句を多用する人がいるが、単語が論文を示すのではない。

テーマが明確であり、主張が読者に伝われば良い。自分なりの文体を身に付けるよう。

文章構造 段落の組み方

150年以上さかのぼるが、明治維新になって、国民の一人ひとりに学問を学んでもらおうとした。日本人の識字率は世界でも高い水準にあったが、文章を書く人たちは限られていた。文章を如何にして書くのが良いか、どのような文体が良いのかが模索された。日本語の模範とされる文章が考えられ、正岡子規、夏目漱石を始め多くの人たちが文章形態を表した。大正の頃「作文教典」の本が出版され、文章の規範が示された。

現在、小中学校で教えられている表現技法は、「作文教典」に基本にして、この枠から出ていないところが多い。時代が進み、大半の人が文章を書き、ワープロができ、ネットができて、いろいろな文体が現れている。一応、基準になる形態はあるが、正しいとされる文体は1つではなく多数ある。

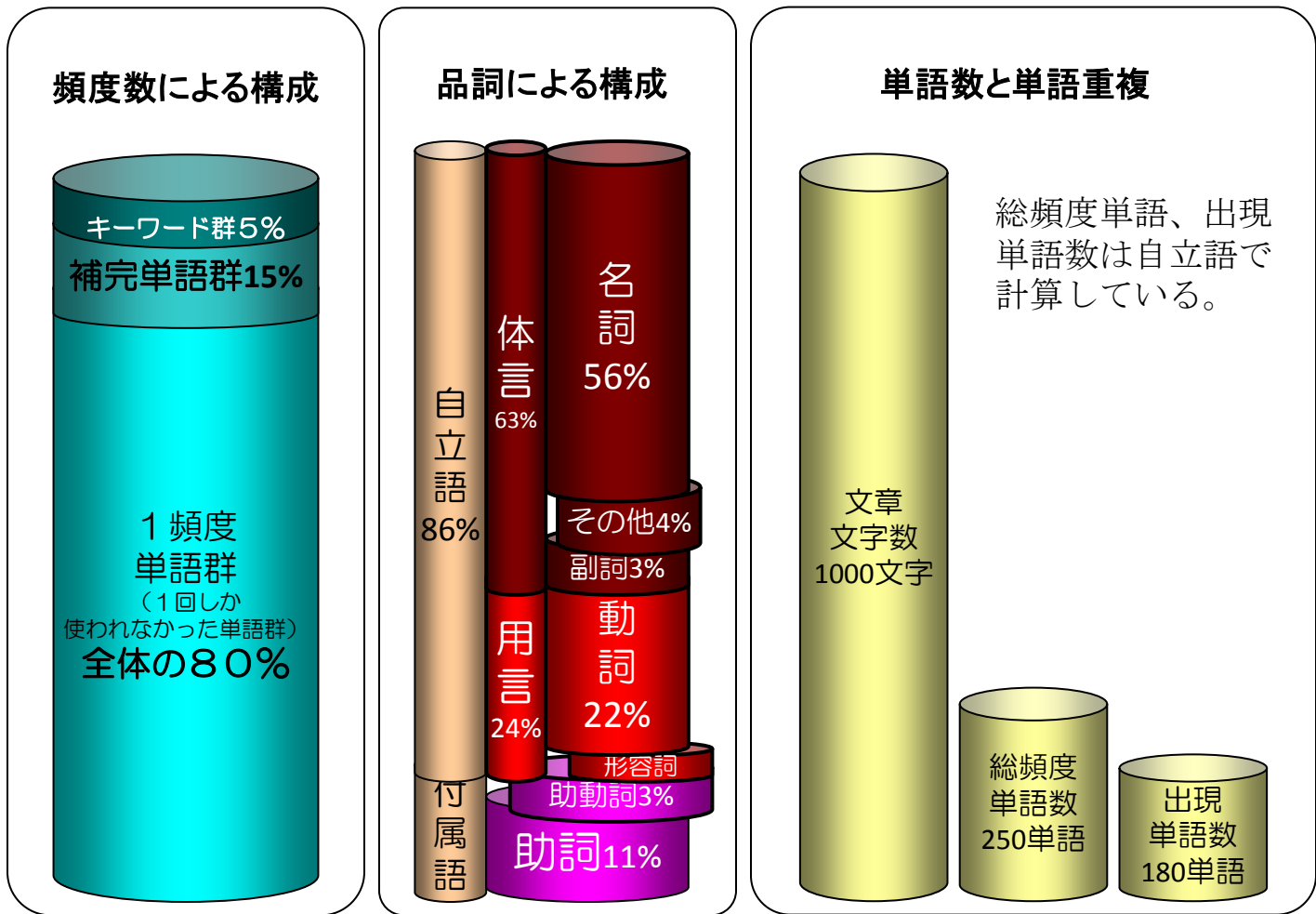
段落形式で説明されている形態を、下に示しているが、結論部分は全て最後にある。頭括式、双括式は示されていない。だが、結論の位置が違っていても、構造は大半同じである。

		三段落形式		四段落形式	五段落形式			
問題提起	➡	序論	序	序	起	起		
問題の背景、問題概要の説明	➡	本論	破	破の序	承	承		
ヤマ場の背景、現状・現象、将来の問題など	➡			破の破	転	転	説話	← 事例など
	➡			破の急		急		
解決策、行動すべき内容	➡	結論	急	急	結	結		

例外1	例外2
結論	序論
事例	事例
	展開
本論	結論
	本論

上記に示した以外に、例外1、2のような形も多く現れている。問題、課題が明確に表され、論理的に間違いがなく、結論が表されておれば、文章は成立する。

文章分析結果 日本語の構造



いろいろな人の文章を、下手な人も上手な人、老若男女の文章を一括にして処理をすると、上図のような割合になる。これが、日本語の構造である。ところが、一つの組織、一つのグループを固まりにして、分析をすると、上図の比率が変わってくる。その変わった部分が組織に特徴になる。

正確に伝えるためのルール

1 論旨展開は、なるべく肯定しながら進めるようにしましょう。

否定から書き始める方が書きやすい。否定を多くすると文章展開がしやすい。しかし、読み手にも否定的な印象を与えやすい。すべて肯定的に表すと文章が弛緩しやすくなる。適度に否定形を入れながら書き進める。

2 論文の場合は、体言止、倒置法の技法は使わず、言い切るようにしましょう。

レトリックの数は40弱ほどある。体言止、比喩も1つである。書き慣れるまでは、言い切る形で表すようにしましょう。

3 引用文はその出典を明らかにする。コピー & ペーストを使うな。

引用するとき、出典と作者を明らかにするのはルールである。引用は、引用の必然の時のみ使うようにしましょう。

4 出来る限り漢字を使え。

一文章での漢字対カナの比率は 1:1.35 ~ 1:1.75 の範囲である。次第にカナの比率が多くなっているが、できるだけ漢字を使うようにしましょう。

5 カタカナ語は、多くの人にとって意味がはっきりとしている単語のみを使え。

外来語をカタカナで表す時、一般に意味が浸透してから使うようにしましょう。語釈が様々であるときは、解説を付け加えておく。

6 むやみに単語を短縮して使うな。

単語の短縮は、他の単語と重なる時があるので注意が必要である。とくに英字での短縮は語釈を入れておく。

7 原稿用紙の書き方に従おう。但し、読みやすさが原則で、出版物の習慣を見習おう。

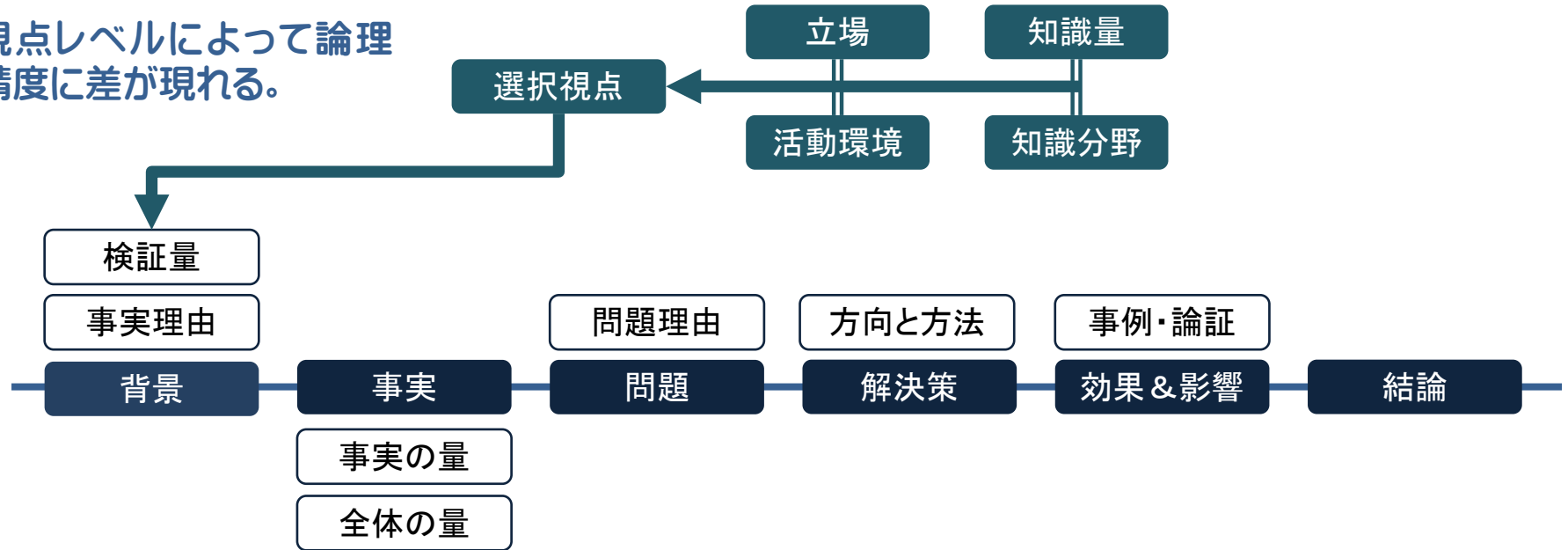
原稿用紙の書き方も時代に応じて変化している。新聞、雑誌など表現方法を見習うようにしましょう。ネット上の表現方法は当てにならない。

8 句読点は小まめにつけよ。句点「。」は忘れるな。

とくに句点は書き忘れるな。文の終わりが分からないとき、文意が変化する時がある。

論理の構造

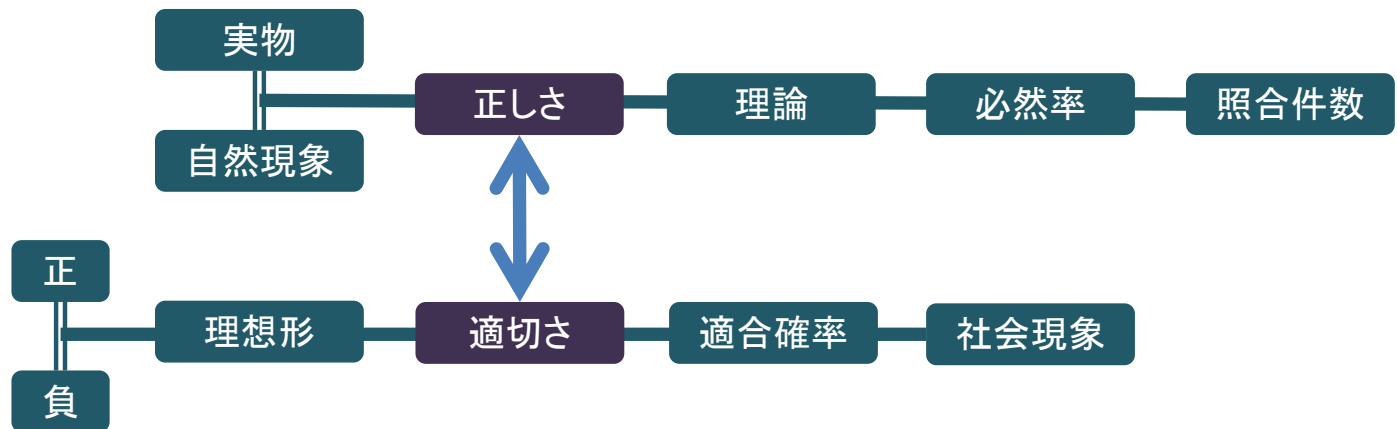
視点レベルによって論理精度に差が現れる。



「正しさ」と「適切さ」は、論理対象および性質が異なる。

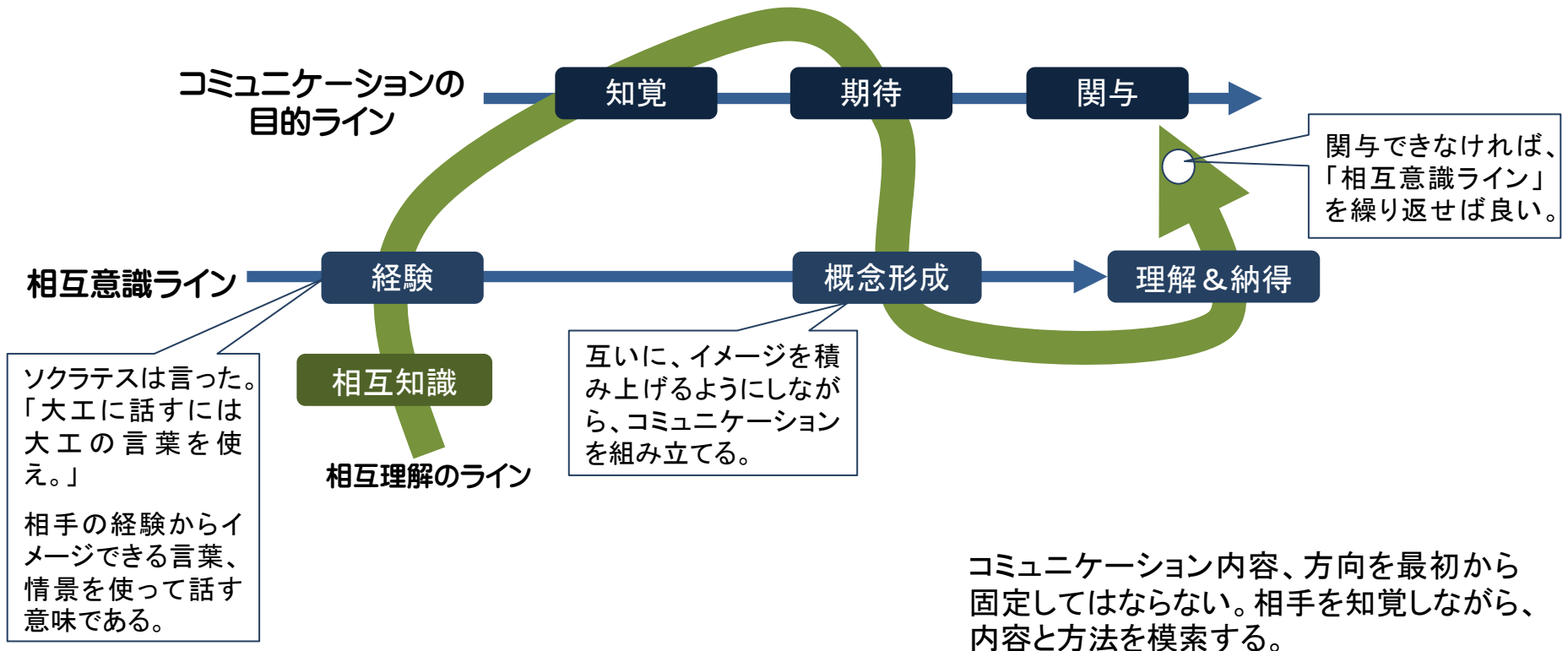
●すべての事柄には正と負がある。

●自分に都合の良い事実は確実に存在する。



コミュニケーションの目的

会議、議論、商談、雑談、等々、コミュニケーションには様々な場面がある。
だが、コミュニケーションの目的、方向は一定である。
コミュニケーションは、互いに**知覚し、期待し、関与する**ために行う。



感動と上手さを創り出す

表現技法に偏ってはならない。技法は最低ルールだけでよい。
自らが感動していなければ、表現は上手くならない。

- 文章は一気に書け。——そして、じっくりと見直せ。
文章を書くときは、自らのしたことを表すのが、読み手にとっては最もバカバカしい。
発見したことを中心に、気付いたことを展開させるようにする。
そのために、見たことを書き留めよ。
- まず、感動をせよ。社会から、外(顧客、市場)から、感動を探せ。
——表現するとは、感動したことを、他の人に返すのと同じだ。
感動を得るには、日常を知らねばならない。自らの日常を分析しなければならない。
解説書を表す時も同じである。外から解説書を書けるようになるまで教わったのだ。
だから、教わったことを返すために書く。
- たくさんのフレーズを持て。——決め手のフレーズを探せ。
・自らのメモを作る、集める。・文学を読む、哲学を読む。そして、言葉を集める。
自らのメモからフレーズを探そうとしてはならない。
メモを積み上げると、自然にフレーズが産まれてくる。
但し、メモから探すと昔に戻り、今に合わないときがある。
- 約束事、前提を忘れるな。その中で、自らの得意を活かせ。
——活かされているとき、自らが輝く。
得意を使えば、上手く出来る。さらに得意になる。読みやすくなる。
- 未来に向かって書け。
今から未来を向いて、過去を、今をテーマにしても、次の手がかりになるように展開させる。

《文章独習》

- 書く前に読み込め。
たくさんの本を読んだ方が良い。エンタメも含めて、読みやすさ、文章の構造を学ぼう。
- 思想の修練
自らの視点、考え方を明らかにし、思考体系を作り出すようにしよう。
- 独創と模倣
文章練習は、書き写す練習よりも、自らの考え書くようにしよう。視点が広がり、独自の境地が開かれやすい。模倣は陳腐化しやすい。

《良い文章への姿勢》

- 何を書くか。何を主張するかを明らかにしてから書き始める。
- 偽らず書く。大げさにしてはならない。

主題のキーワードを決める

基準にするキーワードを決める

「考える」「判断する」「見る」ための自らの基準にするキーワードを3単語設定しておく。常に念頭におき、意識し、ブレないようにする。

- ①
- ②
- ③

1単語では、意味が変化するが、3単語になれば方向が明確になる。
半年、1年は同じ単語群を基準にしておく。

サンプル

考える基準(1)

- ① 機会
- ② 先端
- ③ 革新

考える基準(2)

- ① 原則
- ② 構造
- ③ 全体

考える基準(3)

- ① 機能
- ② ステージ
- ③ 対象

考える基準(4)

- ① 時間
- ② 変化
- ③ 革新

テーマ設定、行動設定のためのキーワード群を決める。顧客に会う前に、顧客にとってのキーワードを設定するとか、商品作りのためのポイントを設定するなどをして、思考、行動を統一する。

サンプル

商品作り(1)

- ① 楽
- ② 早い
- ③ 格好良さ

商品作り(2)

- ① 安心
- ② 美しい
- ③ 安い

顧客を前にして(1)

- ① ニーズ
- ② 目的
- ③ 機能

顧客を前にして(2)

- ① 期待
- ② 調和
- ③ 効果

育成(1)

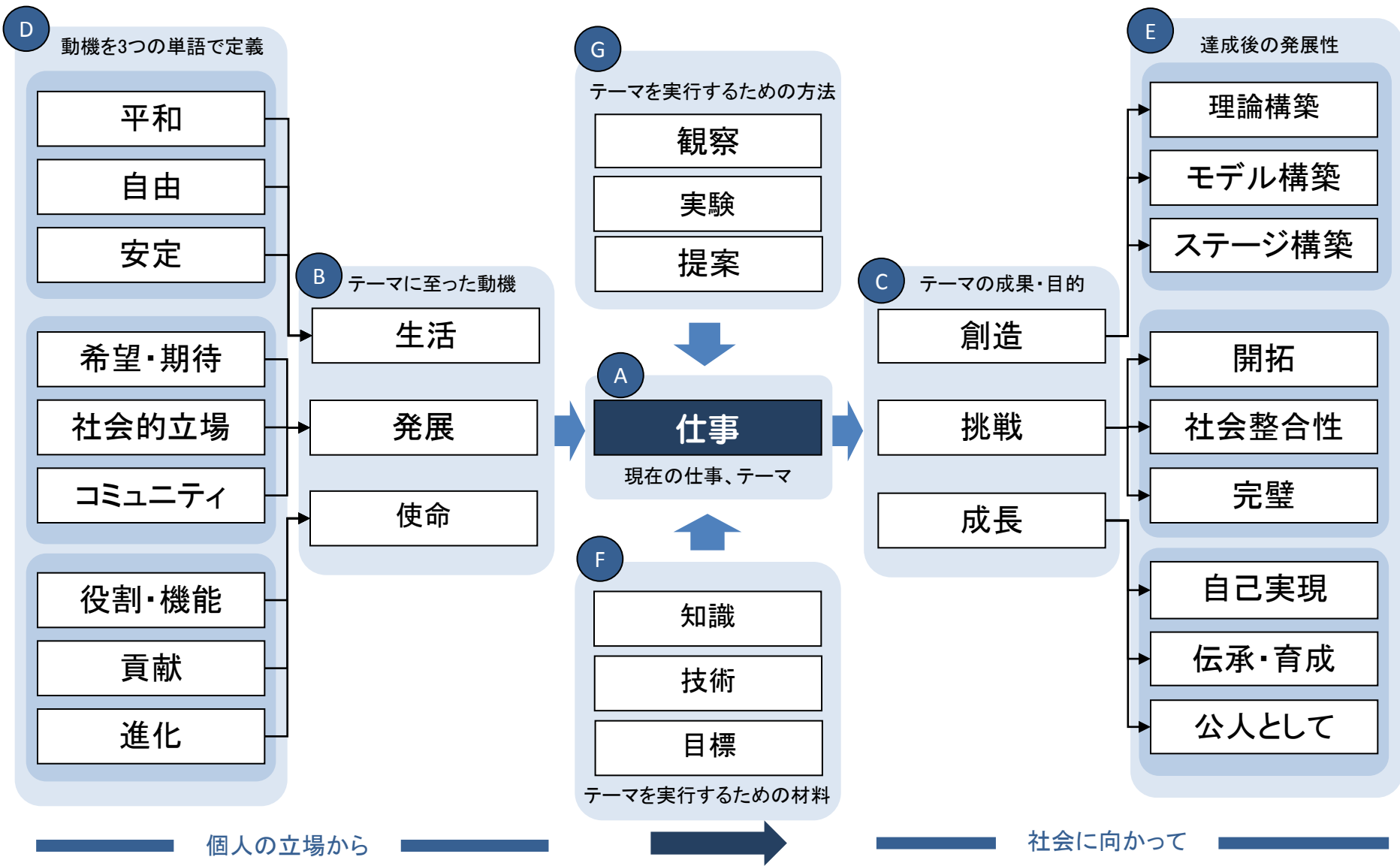
- ① 可能性
- ② 挑戦
- ③ 成長

育成(2)

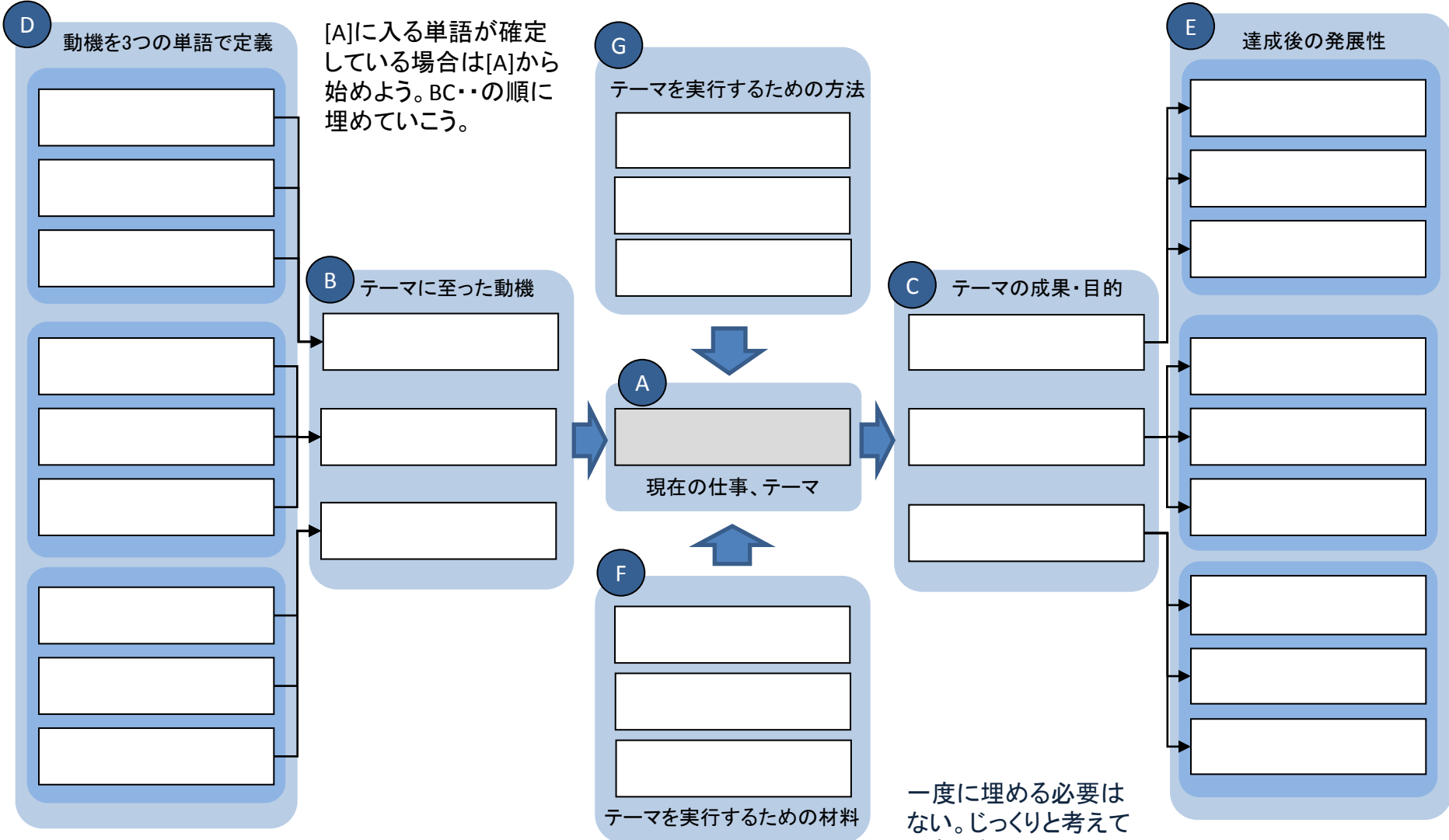
- ① 思考
- ② 創造
- ③ 転換

仕事のベクトル (設定サンプル)

資料

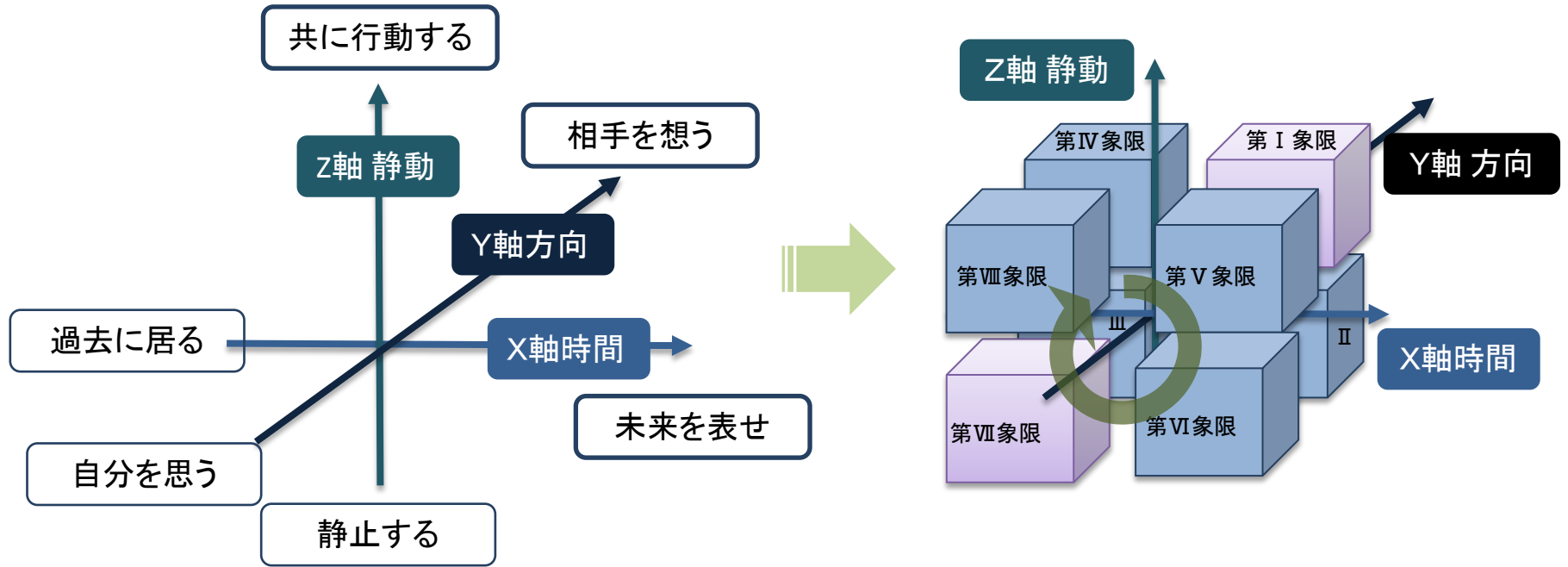


ストーリーを作る



表現する方向

未来に向かい、相手を想う。そして共に行動できるように表現をする。(第 I 証言)
自らの立ち位置、思考と表現の方向を第 I 象限におく。



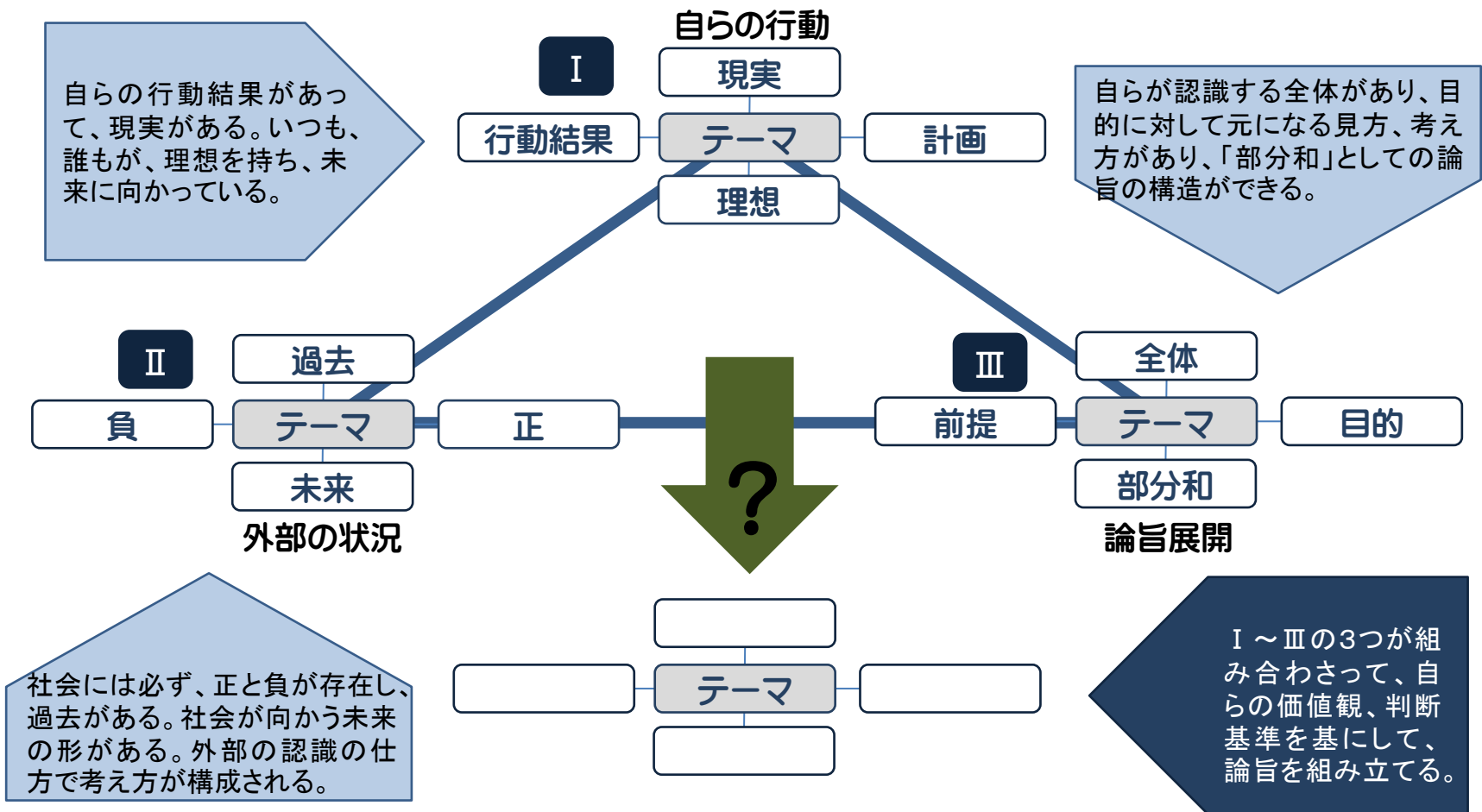
X、Y、Z軸の3つの軸を用いる。
3つの軸、およそ、時間、方向、
静動の範囲で設定している。

上の図のように思考・表現姿勢を分類すると、8つに分かれる。
第 I 象限がもっとも良い状態であり、相反する象限が第 VII である。
第 VII 象限は過去に居て、自分を思い、じっと静止している
状態である。年寄りが昔の栄光を語る状態に似ている。自慢す
る、懐かしんでいては、読者が同意するはずもない。

論旨を整える

表現の論旨展開は、ただ論旨展開をおこなうだけではない。

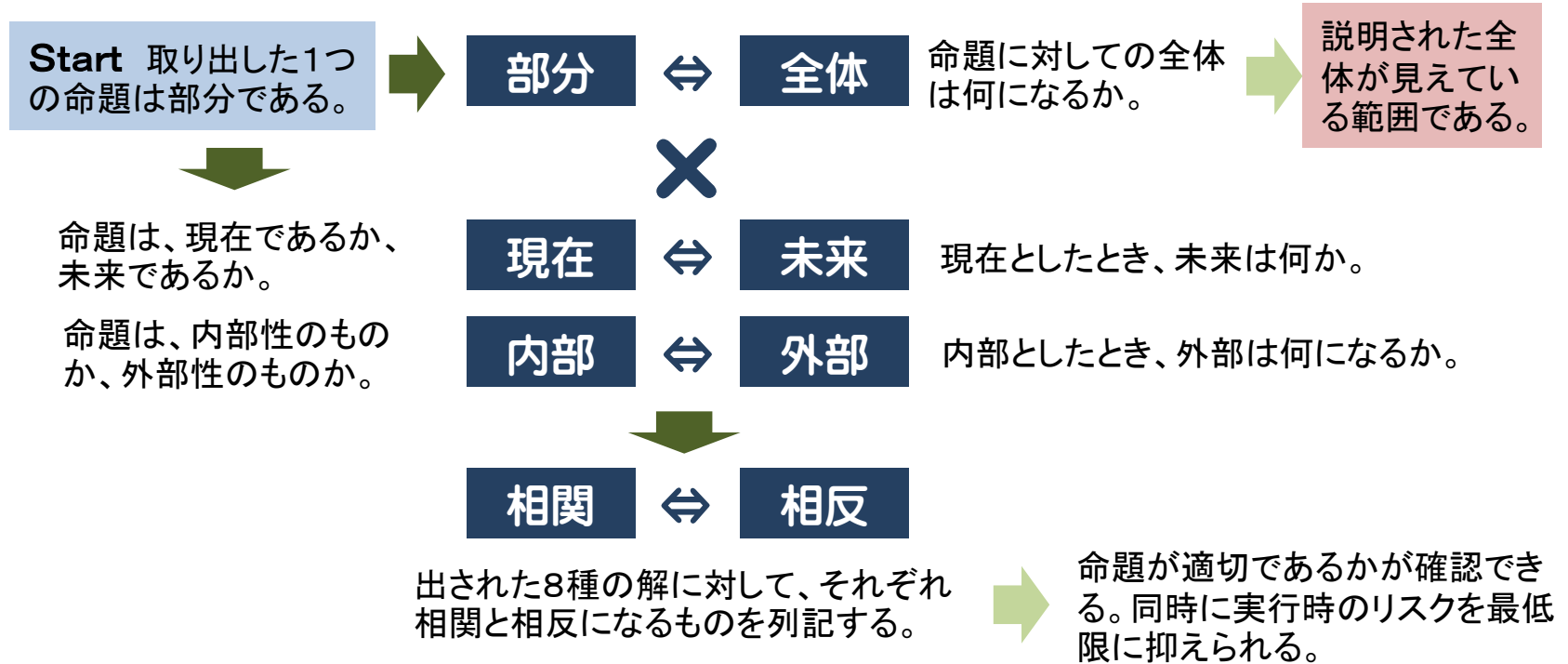
下記の3つが組み合わせあって、主張構造、表現構造ができあがる。



思考バランスー16の状態

論旨の完璧を目指す。

重要な命題を検討するとき、8つの場面、8つの状態を把握しなければならない。



現在を未来に置きかえられるかを確認する。
外部性を内部に取り込む。

3 センテンス 100文字の練習

《日々の目的》

知識、技術の卓越性を指す。
卓越性があったとしても、有効に、最大限に活用されるとは限らない。
視るところを見て、機会を集め、卓越性を集中して、機会を活かせる。

《完璧なもの》

完璧な仕事は終わっても終わらずに続いている。
視る者、聞く者にとって、いつまでも続いている。
完璧なメロディ、完璧な情景は、ずっと過ぎ去った今も、瞼に、耳に残っている。

《明日への現実》

今日の現実、明日の現実は、日々の思考と行動がテーマである。
きょうから明日に向かって、きょうの活動を行う。
昨日までに決めた事柄は、きょうに成果を出し、明日に作り出す準備を行う。

《市場を飛び出す》

競争が激しくなれば、利益率は下がり、上がることはない。
もし、上がっているとすれば、思いもしないところで相乗効果が起こっている。
利益率を上げようとするならば、変革を狙い、市場を飛び出す。

《時間を上手く使う》

人と付き合うには時間がある。
長い時間を話すのではなく、会っていない長い時間が必要で、その時間が会った時間を増幅させる。
良い方向へ行くときは、会ってなくても良い方向へ行くし、逆もまた同じだ。

《相手を認識する》

情報発信をするときは、相手の状態、意識等々を認識しているはずである。
その認識がズレていると、情報発信の効果は薄い。
知ろうとする意識が必要であるし、材料と時が必要である。

《悪意が目立つ》

交通事故、自然災害、病、生命等々の保険がある。
保険は不慮の出来事に備え、安心感を確保する。
仮想通貨への保険が作られ、初めて悪意に対しての保険ができた。

3 センテンスで文章を書いてみよう。